

令和 3 年 5 月 12 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K01497

研究課題名（和文）国際博覧会条約（1928年）及び博覧会国際事務局（1931年）の成立に関する研究

研究課題名（英文）Establishment of the Convention Relating to International Exhibition (1928) and the International Exhibitions Bureau (1931)

研究代表者

佐野 真由子（SANO, MAYUKO）

京都大学・教育学研究科・教授

研究者番号：50410519

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は、今日まで続く万国博覧会が拠って立つ「国際博覧会条約」（1928年採択）、それに基づき1931年に発足した国際機関「博覧会国際事務局（BIE）」の成立過程を主たる研究対象としたものである。公的な国際制度としての万博の諸側面が掘り起こされるとともに、それらが単に、直接の対象である催事の問題にとどまらず、戦間期国際政治過程の一環として評価し直されるべきものであることが明らかになった。

さらに、研究の主要段階において2000年までのBIE理事会／総会資料を通覧する機会にめぐまれたことから、本課題は当初の想定以上に発展し、報告者の新視点による万博通史をまとめるに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の直接的な学術的意義は、万国博覧会に関する先行研究に長く欠落していた、その存立自体を支える制度面の基礎を明らかにしたことにある。同時に、国際関係史に必要な一つの軸として、博覧会史研究を浮かび上がらせることができたと考えている。

そのうえで本研究は、万博という制度を有効な「レンズ」として用い、各時代の世界を展望する新たな視座を開いた。これを「万博学」と称し、論集『万博学』やシンポジウム「万博学」によって広く世に問うに至ったことは、本研究のより大きな学術的意義であり、かつ、とりわけ2025年万博の日本開催に向かう世相において、重要な社会的意義でもあったと位置づけられる。

研究成果の概要（英文）： This project predominantly aimed to investigate the establishment processes of the Convention Relating to International Exhibitions (signed in 1928) and the Bureau International des Expositions (BIE). The convention stipulated the BIE as an intergovernmental organisation for overseeing its operations (inaugurated in 1931 in Paris). In addition to revealing unknown aspects of the initial history of expos as an official international institution, the project has elucidated the significance of placing and re-evaluating them within the framework of inter-war political processes.

Further, research at the BIE Library constituted an opportunity to examine the minutes of the BIE's councils and general assemblies until 2000, which had not been performed until then for academic purposes. Consequently, this project resulted in the completion of an overview of the entire history of expos from a novel approach. This outcome exceeded the original expectation.

研究分野：外交史・文化交流史、文化政策

キーワード：万国博覧会 国際制度 世界 植民地 文化多様性 人類史

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

日本では万国博覧会について、1970年大阪万博を契機に多くの研究が蓄積されてきた。しかし、この催事の持つ根源的な国際性にもかかわらず、主要な学術的関心は「日本の」万博参加、また「日本が」万博開催を企図し、それを実現させていく経過に向き、ひいてはほとんどの場合に「一国研究」の性格を持つものであった。日本だけでなく、諸外国でもほぼ共通した傾向が見られたのである。これを打破しようとするものに、日本では報告者が2010年から継続的に主宰してきた共同研究があり、ヨーロッパにおける類似の動きに、英バーミンガム大学の Marta Filipová が率いる研究があった。

ところが、こうした広がりの中でおも欠けていたのが、万国博という制度自体を、国際関係史の手法によって考察するという視点である。それは、多数の国の万博経験を比較するという意味での国際的研究とも異なる。具体的には、19世紀中葉にイギリスで創始され、当時の列強諸国が追随することで回を重ねていた万国博という催事の性格があらためて整理され、多国間条約の採択によってその制度化が図られ、国際社会の公式催事として今日に引き継がれるための明示的な基盤が形成された、1930年前後の転換期に焦点を当て、史料によってその経過を実証的に明らかにすることである。それを通じて最終的には、国際関係史分析の重要な切り口として万国博覧会を用いる手法を確立することを構想した。

2. 研究の目的

本研究の第一義的な目的は、直接には、上述の多国間条約（1928年に締結された国際博覧会条約）および、同条約の事務局として設立された国際機関である博覧会国際事務局（BIE: Bureau International des Exposition、在パリ）の成立経緯を史料に基づいて明らかにし、万国博覧会をめぐる研究史の空隙を埋めることにあった。

ただし同時に、本研究の目的がそうした直接的な経過解明にとどまるものではないことも念頭に置いていた。——万博の開催国は、広大な会場の構成を熟考し、一望のもとに目下の国際秩序と未来への展望を表現してみせ、そこへ諸外国を迎え入れる。参加各国はそれに呼応し、開催国が表現しようとしている世界のなかに自国を位置づけて展示を行う。先行研究に多かった個々の展示品への関心や、イベントとしての経済効果といった観点から万博を取り上げるケースとは異なり、万博それ自体をこのような包括的ツールとして捉えた場合、その歴史に映し出されるのは、「各時代の人々が世界をどのようなものとして把握し、またどのようなものとしたと考えていたか」の足跡である。

このことは各回いずれの万博にも当てはまるが、万博を恒常的な制度として担保する国際博覧会条約や、それを運用するBIE成立過程での外交交渉、また識者の議論には、当時の人々が「世界をどのようなものとして把握し、またどのようなものとしたと考えていたか」が最も直截に反映されていたと仮定できる。その理念が埋め込まれた制度が、数次の改正を経ながらも今日まで引き継がれ、存続している万国博覧会ということになる。その観点から、この公式国際催事の基本的な性格を条約制定時の原点に戻って歴史的に検証し直すことが、本研究の大目的であった。

3. 研究の方法

本研究が依拠した方法は、直接的な意味においては、国際博覧会条約の採択、BIEの発足に至る過程を、文書に残された交渉や議論の記録から跡付けていく、実証的な歴史研究の手法に尽きる。当初

は、制度化の動きを最初に主唱したドイツや、最終的にリーダーシップをとったフランスをはじめ、議論に参加した各国の公文書館を訪問することも想定していたが、BIE 図書室（在パリ）がそれらの国々の関連文書やその写しを総合的に所蔵していることが確認できたため、結果としては繰り返し同室に通うこととなった。さらに、図書室で公開せず BIE の業務用資料として保管されていた、創設時からの総会／理事会議事録を通覧する許しを得たため、またとない機会として、多くの時間をその調査に費やした。

一方、創設経緯や所在地の影響もあり、長年にわたってフランスの影響が濃厚な BIE に対して、万博創始国でもあるイギリスが歴史的にとってきた姿勢には、とくに見るべきものがある。そのことが BIE での調査過程で確認できたため、そうしたイギリスの立ち位置の「裏取り」を目的として、同国立公文書館でイギリス政府内文書の調査を集中的に行った。このことは制度としての万博史を複眼的に把握し直すうえで非常に効果的であった。

以上の調査を自身で進めるのと並行して、先にも触れた共同研究（申請時名称・「万国博覧会と人間の歴史」研究会／現名称・万博学研究会）を継続した。それを通じて、得られた知見を多分野の専門家との議論によって継続的に確認・更新してきたことは、本研究の方法として特徴ある一側面であったとすることができる。

4. 研究成果

結果として、国際博覧会条約および BIE の成立過程を軸に、先行研究に欠落していた万博の存立自体を支える制度的基礎を、知られていなかった多くの事実関係とともに明らかにすることができた。ただし、より大きな成果は、その成立過程が単に万博という催事の問題にとどまらず、戦間期国際政治過程の一環として位置づけられ、評価し直されるべきものであることが明らかになった点である。博覧会史の研究を、国際関係史の考察に必要な一つの重要な側面として、浮かび上がらせることができたと考えている。

本研究はさらに、既述のとおり、研究の主要段階において、いまだ本格的な学術研究に用いられたことのなかった BIE の理事会／総会資料を通覧する機会にめぐまれたことため、当初の想定以上の発展を見ることとなった。具体的な成果として、国際博覧会条約成立期を中心としつつも、報告者の新視点による万博通史をまとめるに至った。別の述べ方をすれば、万博という制度を有効な「レンズ」として用い、各時代の世界を展望するという研究視座を開き、その視座を、新たな時代区分による万博通史という形で示した。

この視座を「万博学」と称することにし、既出の共同研究で共有したうえで、研究最終年度に論集『万博学——万国博覧会という、世界を把握する方法』（佐野真由子編著、思文閣出版、2020 年、計 556 頁）を発売したが、その巻頭論文として収録したのが、報告者による上記の新しい万博通史である（佐野真由子「序説・万国博覧会という、世界を把握する方法」3—43 頁）。2020 年 12 月には、もう一つの総合的な成果発信の方法として、丸 2 日間のシンポジウム「万博学」（於・京都大学百周年時計台記念館）を実施したが、コロナ禍によりオンライン併用開催としたことが功を奏し、各日、世界各国の多様な分野の研究者ら約 200 名の参加を得て闊達な議論を行うことができた。

なお、本研究期間中に 2025 年万博の日本開催が決定したことは、学術的な万博研究に、自ずと大きな社会的意義を付与するものであった。関心の増加が追い風にもなったが、一般の関心が高まるなかでいかに学術的研究を維持するか、という問題についてたびたび考えさせられ、多くを学ぶ貴重な過程となったことを付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 佐野真由子	4. 巻 74-9
2. 論文標題 万国博覧会と「世界」 その来し方を振り返る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 土木技術	6. 最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mayuko Sano	4. 巻 -
2. 論文標題 Nothing but nation building: Promoting Japan's national image at early Expos	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BIE Bulletin 2019	6. 最初と最後の頁 90-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 5件／うち国際学会 5件）

1. 発表者名 佐野真由子
2. 発表標題 1862年第2回ロンドン万博の「世界」と幕末日本
3. 学会等名 姫路文学館研修講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野真由子
2. 発表標題 万国博覧会 「世界」を映した170年
3. 学会等名 第2回博覧会を歴史に学ぶセミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野真由子
2. 発表標題 原点としての「開国」外交
3. 学会等名 公開ワークショップ「新しい文化政策の構築をめざして」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野真由子
2. 発表標題 万博史の中の70年大阪万博
3. 学会等名 北大阪ミュージアム・ネットワーク シンポジウム 大阪でEXPOを考えるII「博覧会の歩み - '70万博への道 - 」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野真由子
2. 発表標題 中国を国際社会に引き入れた万国博覧会
3. 学会等名 上海社会科学院世界中国学研究所主催国際学術研究会「海外における中国研究」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mayuko Sano
2. 発表標題 To join "the warfare of peacetime": Japan's quest for national history through expos during the late nineteenth century
3. 学会等名 Global History Collaborative Seminar "National Narrative of Global Integration" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野真由子
2. 発表標題 万国博覧会という、世界を把握する方法
3. 学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会「万国博覧会と人間の歴史」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野真由子
2. 発表標題 序説・万国博覧会という、世界を把握する方法
3. 学会等名 シンポジウム「万博学」（万博学研究会主催）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野真由子
2. 発表標題 「普遍的」装置としての万博 その足跡と可能性
3. 学会等名 第38回比較文明学会大会 シンポジウム 「万博とユネスコの文明論的意義を考える」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野真由子
2. 発表標題 理解世界の方法 万国博覧会
3. 学会等名 「比較視野の博覧会史 物質、制度及其文化変遷」国際学術検討会（華中師範大学中国近代史研究所主催）（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 佐野真由子（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 556
3. 書名 万博学 万国博覧会という、世界を把握する方法	

1. 著者名 佐野真由子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 290
3. 書名 クララ・ホイットニーが綴った明治の日々	

1. 著者名 佐野真由子（編著）、ユク・ヨンス（韓国語版編者）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ソミョン出版	5. 総ページ数 501
3. 書名 万国博覧会と人間の歴史（韓国語訳）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 シンポジウム「万博学」	開催年 2020年～2020年
-----------------------	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	華中師範大学中国近代史研究所			